ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.8 August 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言
「型」について④
／永尾　教昭 1

・文脈で読む「身上さとし」（2）
増野正兵衛とその「おさしづ」
／深谷　耕治 2

・伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（36）
天理教教義翻訳の諸相③
／成田　道広 3

・英語文献にみる天理教（新連載）
はじめに：天理教はどうみられてきたか？
／尾上　貴行 4

・音のちから―中国古代の人と音楽（9）
昆虫にも音楽がわかる？
／中　純子 5

・ヴァチカン便り（57）
混迷する次期法王の選出
／山口　英雄 6

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（20）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 7

・2022年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第1講：151「をびや許し」
／永尾　教昭 8

・2022年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（8）
第2講：111「朝、起こされるのと」
／澤井　真 9

・図書紹介（131）
櫻井義秀著『東アジア宗教のかたち 比較宗教社会学への招待』（法蔵館、2022年）
／堀内　みどり 10

・おやさと研究所ニュース 11

2022年度伝道研究会／第348回研究報告会／天理参考館で記念講演／第63回印度学宗教学会学術大会で発表／日本イスラム協会で講演／第349回研究報告会／連載執筆のねらいと執筆者紹介／2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「型」について④

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

文化でも信仰でも、特定の国や民族で始まったものが他国や他民族に伝播していくとき、意図的かどうかはともかく、必ず多少なりとも型が変わっていくと思う。アメリカで始まった野球は、日本に来て試合前に両チームで「礼」をするなど型が変わった。インドのカレーと日本のそれはやや違う。日本のバレンタインデーでは、女性が男性にチョコレートを贈る日になった。

そんな中でも、とりわけ日本人は型にこだわり重視する民族だと思う。したがって、日本発祥の文化が外国に広まっていくのにも、その国の民族性に流されて型が変わっていくのを必ずしも良しとしない。柔道でも茶道でも外面的な型を守らせ、そこに込められている精神性さえも理解させようとする。しかし、それらを外国でより一般に普及させたいと努める者は、その国の人にも入りやすいように型を変えてしまうので、本家本元から批判されることがある。実際、先日、筆者は日本の空手道関係者と面談したが、彼は「今の国際大会の空手は本来の空手ではない」と批判していた。

一方型を変えることで、その文化や信仰に親しめるようになるであろう外国人はそのことをどう捉えるのだろうか。筆者はヨーロッパで天理教の信仰を広めようと微力を尽くしたが、教えや「つとめ」と呼ばれる最高祭儀そのものは変えることはありえないが、やはり型を許容される範囲で変えようと努めた。そのような中で、思いがけないことがあった。

現在フランスにある天理教ヨーロッパ出張所の神殿参拝場は、日本式に靴を脱いで上がる。アジア諸国はともかく、アメリカ伝道庁、メキシコ出張所、コンゴブラザビル教会などは土足のままだ（上段と呼ばれる祭儀を司る場所はいずれも靴を脱ぐ）。無論、それぞれその国の文化を尊重したのだろう。

ヨーロッパ人の中には、屋内で靴を脱ぐことに違和感を感じる人も多い。筆者はある会議で、これを土足にしようと提案した。最終的には否決されたのだが、その際、強く反対意見を述べたのがヨーロッパに派遣されている日本人布教師ではなく、現地ヨーロッパ人の信仰者だったのだ。そして、その場にいた天理教海外部の役職者は「ヨーロッパ人が反対しているのをなぜ変える必要があるか」と言い、結局現行の状態に決まった。日本人布教師である筆者が、ヨーロッパ人のことを慮り、日本的な型を変えようとしたことに対して、当のヨーロッパ人が断固として反対したのだ。その構図を第三者的に見ると、実に奇妙に映るだろう。

同様に、以前も述べた「みかぐらうた」（つとめの地歌）を、歌いなおかつ踊れる（歌詞の意味と動作が合致する）ような形で各国語に翻訳することについても、彼らは反対で日本語ですべきという考え方であった。つまり、それぞれの国で天理教を熱心に信仰する現地人信者らは、先達として型という言わば壁を乗り越えてきているのである。そしてそれゆえ、その型も信仰に重要な一つの要素だと捉えている。彼らの口からよく出てくるのが「おぢば（天理教本部）が〇〇されているから…」である。天理教本部でなされている様式を、そっくりそのまま踏襲するのが真の信仰であり、我々はそれを実践してきたという自負があるのだ。

だから、安易な道に流されずに、その型のまま信仰を広めるべきだと考えるのだと思う。こうなってくると外国での信仰の伝播を目論んで型を変えようとする布教師は、出口つまり本元からも批判され、入口つまり布教地でも批判されるという微妙な立ち位置になる恐れはある。

文脈で読む「身上さとし」（2）

増野正兵衛とその「おさしづ」

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

本連載では、「おさしづ」における「身上さとし」を個々の文脈に即してみていく。具体的には、まず増野正兵衛を中心とした増野家に関する「おさしづ」を読んでいきたい。

なぜ増野家なのか。増野正兵衛は「おさしづ」の書取人として本席の身近にいた。再三お言葉を仰げる立場にあったからか、他の人に比べて数多くの「おさしづ」を頂いており、身上に関しても割書きに記された病状にはさまざまなものがある。そのため「頭痛」や「胸むかつく」など病状別に項目を立てている『身上さとし』（深谷忠政著）においても、増野家の「おさしづ」は数多く採用されており、その実質的な内容を構成している。増野家に対する「おさしづ」は個別的な事例であると同時に、「身上さとし」に対して豊かな事例を残しているといえよう。

今回は、「おさしづ」研究の前提として、『稿本天理教教祖伝逸話篇』および『増野正兵衛傳』（私家版、1923年）や『先人素描』（高野友治、1979年）に拠って増野家の信仰の経緯について確認しておく。

○増野正兵衛の略伝

増野正兵衛は、嘉永2年（1849）に山口県萩藩士の増野庄兵衛の長男として生まれた。幼年時代は萩の藩校である明倫館で文武を学び、青年時代には明治維新にともなって東京で天皇の御親兵係として勤めた。その後、鉄道員になり、明治7年に神戸の三宮駅に勤務。同じ頃、縁あって春野いとと結婚している。

明治11年に同駅の助役となったが、その頃から体調を崩すようになり鉄道員を退職することになる。その後、神戸の元町に家を建て「東京屋」という屋号で小間物屋を開始。この頃名前も「正兵衛」に改めている。

明治14年頃から、妻のいとが目を患い、ソコヒとの診断を受ける。ソコヒとは、「眼球内に障害があって物の見えなくなる病気」（デジタル大辞泉）とされる。

それから3年後の明治17年、いとは、失明寸前になってしまうが、昔なじみのお蝶さんという人からお道の存在を知る。いとは「夫婦そろって神様に願えば、どんな病気もたすけてもらえる」と聞き、正兵衛にもこの道の信仰を勧めた。正兵衛ははじめは相手にしなかったが、いとの懇願によって心を動かされ、ついにお道の話を聞くことにする。そのとき、お話を取り次いだのは、お蝶さんの父親の小山弥左衛門という人であった。正兵衛夫妻は「身上の埃は八つの埃の心得違が顕はれて、心から病み患ふのである。この八つの理を懺悔すれば、必ず身上をお助け下さるに相違ないから、眞實誠の心になって、神様にもたれよ」[(1)]と諭された。

お話を聞いた翌日、いとの眼はうっすらと見えるようになった。また、正兵衛は明治6年頃から脚気を病み、足が痺れたり腰の立たないこともあったが、そのとき「食事といふても悉く神様の御守護に基づくものであるから、毒となるべきものは一つとしてない」と聞き、神様の力を試すように、その夜にそれまで禁じていた酒を神前に供え、そのお下がりを飲んだ。すると、翌日不思議と気分が良くなった。その後一度は病状も元に戻ったが、夫婦そろってお願いを続けるうちに、正兵衛の数年間の病状は15日ほどで回復し、いとの眼病も30日ほどで全快した。このようにして、夫婦の身上を鮮やかにたすけてもらい、増野家の信仰が始まる。

その後まもなく正兵衛は神戸からの参拝者とともにおぢばがえりした。教祖にお目にかかったとき「正兵衛さん、よう訪ねてくれた。いずれはこの屋敷へ来んならんで」（逸話篇145）とのお言葉を頂く。そして、神戸とおぢばを往復する日々が続いたが、正兵衛はおぢばから離れると不思議と体調を崩すようになり、教祖から「いつも住みよい所へ住むが宜かろう」とのお言葉を頂いた。

それからも正兵衛は熱心に信仰を続け、明治20年頃にはおぢばに詰めるようになっており、教祖が現身を隠された際には教祖の御前に仕えていた。また、同年5月14日に、本席飯降伊蔵より「おさづけの理」を頂いている。

明治21年に天理教会本部が東京に設置されたときには会計兼派出係となり、また、教会本部がおぢばへ移転されるまで東京本部詰の任に当たった。

明治22年の兵神分教会の設置に際して、会長候補となったが、「おさしづ」のお言葉からおぢばで勤めるようになった。明治23年正月からおぢばに住み込むようになり、本部の会計係として、また本席の「おさしづ」の書取人として勤めた。

中河、敷島、日本橋、兵神の各教会の事情の整理、明治34年に教区制度が発足されると第一教区の担当者として教区内の教会を巡回した。そして、大正3年（1914）に巡教地の大阪教務支庁で享年65歳で出直した。

○増野家の「おさしづ」

正兵衛が「おさしづ」の書取人であり、お言葉を身近に伺うことができたということもあって、増野家に頂いた「おさしづ」は他に比べてかなり多い。年代で見ると明治20年から40年まで（明治35年をのぞく）すべての年に「おさしづ」を頂いている。

割書きには、増野家に関わりのある人としては次のような人々が挙げられる。

増野正兵衛／増野いと（妻）／荒木しか（後妻）／増野道興（長男・敷島大教会四代会長・豊繁分教会四代会長）／増野おとも（四女）／増野松輔（甥・正兵衛の姉まちの長男）／増野喜市（甥・正兵衛の姉まちの次男）／増野たけ（妹）／増野いね（姪・たけの次女・兵神大教会清水由松の妻）／春野ゆう（妻いとの母）

また、身上に関しては、割書きには「胸の下障り」「足だるみ」「耳なり」「鼻咳」「口中」「口中歯」「足の先霜焼け」「咽喉腫れ食事通り兼ね咳出る」「歯浮き」「胸むかつき気分悪しく」「目かい」「足のくさ」「咽喉塞ぐようになる」「鼻先一寸痛み」「夜泣き」「腹が下り」「熱強く食事味無き」など多数見られ、さまざまな身上に関して「おさしづ」を伺っていることが分かる。それでは、次回よりそれぞれの身上に込められた神意を「おさしづ」を通して探究していきたい。

［註］

（1）『増野正兵衛傳』（私家版、1923年）、14頁。

天理教教義翻訳の諸相 ③

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

大正期の教義翻訳

明治30（1897）年、アメリカ人宣教師ピーリー (Rufus Benton Peery) が出版した『日本の要点』(*The Gist of Japan*, New York: Fleming H. Revell Company, 1897.) で天理教が紹介されると、明治43（1910）年、英文通信社の望月小太郎が日英博覧会を記念して出版した『現時の日本』(*Japan To-day; a Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910*, Tokyo: The Liberal News Agency, 1910.) でも紹介された。さらに大正にかけて論文等で天理教が紹介されると、外国人研究者がおぢばを来訪するようになった。彼らは天理教に関する英文書籍を求めたが、船場の『英文天理教』以外に確固たる教義翻訳書は皆無であった。そのような状況で天理教校長の増野道興は英文教義書の必要性を認識し、出版に向けてまず日本語教義書を執筆した後、英訳を奈良女子高等師範学校教授の小泉卓蔵に依頼した。偶然にも出版作業の最中、ローマで開催される宗教博覧会に出展するよう文部省から天理教に依頼があり、この英文教義書の出版を急ぎ、実写フィルム3巻とともに出展することになった（中西，1924:8）。こうして出版されたものが増野道興原著『英文天理教』(*TENRIKYO*, Tambaichi: Doyusha, Tenrikyo Head Church, 1924.) である。これは教会本部から出版された初の教義翻訳書となった。その巻末には英訳「みかぐらうた」が収録されている。これは当時、英国赴任中の岩井尊人（たかひと）が英訳したものである。明治期以降、外国人研究者らが「みかぐらうた」の翻訳を試みたが、教内関係者による英訳としてはこれが初出である。ちなみに前年の大正12（1923）年、上海の中華教会（日本橋、原澤進会長）から『御神楽歌：天理教漢訳』（大和正夫訳）が出版されており、教内の外国語訳「みかぐらうた」としてはこちらが初出となる。

岩井尊人は増野道興、小野靖彦、広池千九郎らとともに大正期に活躍した論客の一人で、東京帝国大学在学中の大正3（1914）年から『道の友』に連載をはじめ、その論考は昭和13（1938）年まで103篇にわたっている。彼は幼少期から中山家に出入りしていたようで、中山正善2代真柱の大阪高等学校進学も岩井の進言から実現したという（岩井，1938:41）。大学卒業後は三井物産に勤め、大正15（1926）年までロンドンに赴任した。昭和11（1936）年には、二・二六事件ののち組閣された廣田内閣の文部大臣、平生釟三郎の秘書官を務めた。その頃、急速に台頭した陸軍が政治介入を強め、その圧力をうける文部省と本教との間で思想統制をめぐって緊迫した交渉が続いていた。2代真柱は対応を協議する過程で岩井に助言を求められることもあった（東井，1997:163-168）。いわゆる「革新」という教団の運命を左右する一大局面において、岩井は助言だけでなく『論達第八号』草案に加筆訂正するなど深く関わった（東井，1997:172-174）。

教学との接点をみると、岩井はまず大正4（1915）年に『天理教祖の哲学―みかぐらうた新研究』を出版している。その中で岩井は数え歌としての「みかぐらうた」の特性に着目し、「民衆の間に普及融和するには之の形が最も好都合である。記憶されやすく、反復吟誦は反射的であるから記憶を想ひ起すの精神抵抗がないなど、みな科学的に実証されるのである。惟ふに言語の極致は詩歌である。（中略）教祖が数へ歌の形を採られたのは之の内発的の必然性によつてゐると思ふ」（岩井，1915:22）と述べている。また昭和3（1928）年に出版した『泥海古記　附注釈』では、神道の在来神と同名の神名との相違を明確にし、天理教教義の独自性を強調しつつ、泥海古記の象徴的理解の重要性を説いている。『こふきの研究』によると、岩井は「泥海古記は支離滅裂だから問題を起こすのだ。今のうちに整文しておかねばいつまでもその禍根が断たれない」として同書を出版したという（中山，1957:4）。いずれも本教教義を学際的知見から捉え、教外者の誤解や偏見を克服しようとした氏の先駆的な姿勢の証左である。そのような岩井の教義理解に関し、金子圭助は「尊人の本業は何んと言っても実業家であったであろうが、「道の友」に繁く寄稿し、そのことに依って天理教教義を深く理解した。深く理解しただけに終らせず教義を真正面から論述し、その時その時の趨勢を鋭くキャッチし、信者の陥りがちな陥穽に警鐘を鳴らしたり、啓発したりしつつ、氏の立場から本教の方向をリードした。尊人ほど世界的視野をもち幅の広い、かつ透徹した知識による分析は誰にもまねのできることではない。」（金子 1990：236）と評価している。

さて、岩井の「みかぐらうた」英訳を見ると、第1節では、

「あしきをはろうてたすけたまえてんりおうのみこと」(Evil being swept away, Save us, Parent, Tenri-o-no-mikoto.)

とあり、「てんりおうのみこと」の神名の表現に God を使わず、注釈で The name of the Supreme Being としている。第2節以降にも God は用いられていない。さらに神名の前に Parent を用いて親神の訳出に苦心している。岩井は可能な限り西洋的神概念からの切り離しに配慮したようだ。また第2節の英訳では、

「ぢとてんとをかたどりてふうふをこしらえきたるでな」(Taking as pattern the Earth and Heaven of this Universe, I create Wife and Husband.)

とあり、現行訳では「ぢとてん」Heaven and Earth、「ふうふ」Husband and Wife となる個所を、岩井は極力原文の語順と手振りに対応するような語順で訳した。上述の第1節も「あしき」Evil から始まっているように、つとめの地歌としての性質を考慮しつつ、極力それに適うよう配慮していたようだ。当初から地歌として機能する英訳を模索していたようにみうけられる。さらに岩井は昭和7（1932）年に『英訳天理教綱要』(*The Outline of Tenrikyo*, Nara: Tenrikyo Doyu-sha, 1932.) を出版し、その中で一部改訳した「みかぐらうた」英訳を紹介している。昭和8（1933）年9月10日号の『天理時報』によると、その岩井の英訳「みかぐらうた」は、明本京静によって吹き込まれてレコードとなり、世界宗教大会出席のため渡米していた中山正善2代真柱の手許に送付された。開催地のシカゴでは、岩井の『英訳天理教綱要』と英訳「みかぐらうた」レコードが紹介され、天理教教義の顕揚に大きく貢献した。英訳「みかぐらうた」が地歌として吹き込まれ、そのレコードが海外で紹介された事実は、教義翻訳史上、画期的な出来事である。「みかぐらうた」に対する岩井の慧眼と、氏の英訳という功績なしにはその偉業は成し得なかった。教学史のみならず、教義翻訳史においても岩井尊人はまさに先駆的な存在であったといえよう。

［引用文献］
岩井尊人『天理教祖の哲学―みかぐら歌新研究』一成社、1915年。
岩井尊人「御母堂様を偲びまつる」『道の友』、1938年9月号、pp. 40-42。
金子圭助「岩井尊人の天理教学研究―天理教教理史研究の一齣」『ビブリア』、1990年11月第95号、pp. 232-249。
東井三代次『あの日あの時おぢばと私（上巻）』養徳社、1997年。
中西喜代造「“TENRIKYO”出版の前後」『道の友』、1924年10月号、pp. 53-61。
中山正善『こふきの研究』天理教道友社、1957年。

はじめに：天理教はどうみられてきたか？

おやさと研究所講師
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

天理教の海外伝道を考える上で、日本国外の人々へ天理教の教えをどのように伝えるかは重要な課題であるが、同時に外国の人々が、天理教の教えをどのように受け止め、理解するかということも、充分に考慮されるべき事柄であろう。私たちの日常生活での何気ないコミュニケーションにおいても、伝える側の意図と受け取る側の受け取り方に差異が生じることは少なくないが、言葉、文化、生活習慣などが異なる国や地域においては、その度合いがさらに大きくなる可能性がある。またそれは歴史的な背景や日本との関係性にも影響される場合もあろう。

数年前のことになるが、筆者が所属するある研究会の例会で、天理教がどのように理解されているかについて考えさせられる機会があった。その例会で一人の研究者が、戦後のハワイにおける神道の復興に関連する発表を行った。アメリカ合衆国公文書記録管理局（United States National Archives and Records Administration, NARA）が所蔵する公文書に基づいて、ハワイ金刀比羅神社の資産返還訴訟について検討したものであった。天理教は主な話題ではなかったが、その公文書には天理教に関する記述もあり、報告のレジュメには以下のような記述が含まれていた。なお、カッコ内の英文は、レジュメの記述に該当すると考えられる部分を筆者が原本から抜粋した。

- 「天理教は日本の世界支配を説く。」(In the Holy Scripts of Tenrikyo, probably the least nationalistic of all the Shinto sects—or at least one of the least nationalistic—are indications of the Japanese governmental influence on Shinto. I quote below a few verses to indicate the idea of world domination at expressed in Shinto. "Hereafter Japan shall command foreign powers, All of you, do note it well."[(1)])
- 「天皇に対する忠誠と愛国心を重視し、天皇崇拝が強い。」(patriotism and obedience to the Emperor and Imperial ordinances.[(2)])
- 「天理教、中山みき教祖、いわゆる日本の Christian Science」(Tenri Kyo (Divine Reason Teaching), the so-called Christian Science of Japan. Founded by a woman, Mrs. ZAMBEI（英文ママ）NAKAYAMA (nee MIKI MAEKAWA, 1798-1887)[(3)])

発表後の質疑応答の中で、その研究者より筆者に対して「当時、天理教は日本の世界支配を説いていたのか？　天理教は日本の Christian Science なのか？」との質問があった。筆者は、その公文書の原文を精査する必要があると前置きした上で、天理教は日本による世界支配を説いていないこと、また女性が教祖であり病気治しをおこなっていたことなどから、天理教は、クリスチャン・サイエンスと似ていると言われることがあった、と返答したと記憶している。

その後、他の質疑応答が活発に継続したため、筆者はそれ以上に深く考えずに終わった。またその公文書が作成されたのは戦前であり、天理教の歴史におけるいわゆる「革新」の時代に作成されたものであることから、当時の状況からすると、天理教に関するそのような誤解があったことは充分に考えられると思った程度であった。しかししばらくして、アメリカでの日系人戦時強制収容政策に関する公文書資料を調査している中で、似たような記述が散見することに気がついた。天理教や天理教関係者、また天理教の教えについての記述を読む中で、天理教は当時どのように理解され、このような公文書で記述されたり、あるいは新聞などのメディアで報じられてきたのかをもっと深く知る必要があるのではないかとの思いが強くなった。前述したように、天理教の海外伝道において、だれが、なにを、どのように伝えるかは大切な事柄であるが、これまで伝えられてきたもの、あるいは伝えようとしたものが、どのように受け止められてきたかを知ることも重要であると感じたのである。

天理教内でも、教外者による天理教研究については、これまでもさまざまな検討がされている。主な研究としては以下のものが挙げられる。

- 中西喜代造「外国文献に現れた天理教」1～32『天理時報』昭和6年（1931）1月1日～同年9月10日。
- 富永牧太「外國人の天理教研究―文献を中心として―」『日本文化』第11号、昭和12年（1937）10月、171～193頁。
- 飯田照明「欧米人による天理教の研究―文献を中心として―」『やまと文化』第50号、昭和45年（1970）3月、135～169頁。
- 大久保昭教『外国人のみた天理教』天理教道友社、1973年。

特に、最後に挙げた大久保昭教氏の著作は、それまでの研究を網羅したものであり、かつ代表的な研究における特徴とその内容に関する批評的なコメントが述べられており、この分野での代表的な文献といえる。その巻末には、主だった研究者による天理教研究の文献リストがあげられている。

おやさと研究所が毎年発行している『Tenri Journal of Religion』に掲載されている論文など、天理教に関する英語で書かれた論文のなかにも、教外者がみた天理教という観点から論じられているものがある。また、宗教学や宗教社会学を専攻する大学院生が、修士論文や博士論文で天理教について取り上げることは、戦前から現在に至るまでしばしばみられる。

さらに、大久保氏は『外国人のみた天理教』の巻末にまとめた天理教研究の文献リスト「―天理教に関する欧米文献―」への付記として「以上主なものを列記したが、このほかにも新聞、雑誌に掲載されたものは数多いが、ここでは割合した。」と述べている。天理教について英語で記述した新聞や雑誌は数多くあり、すべてを網羅し、検証することは容易ではない。しかし、そのような英語の文献にあたることは、その時代や地域の人々が天理教をいかにとらえ、理解していたのかを知る上で非常に意義あることだと考えられる。そこで本連載では、宗教学者などの研究者による専門的な著作や学術論文ではなく、主に海外における英字新聞や雑誌、あるいは政府公文書などにみられる天理教についての記述に注目していきたい。

［註］

（1）R. J. Main, “Shinto Religion in Hawaii,” March 16, 1940. NARA, RG60, E146-10, Box5., p. 11.

（2）John Sterling Adams, “Shinto Sects in the Territory of Hawaii," December 29, 1942. NARA, RG60, E146-10, Box5., p. 22.

（3）ibid., p. 18.

音のちから―中国古代の人と音楽（9）

昆虫にも音楽がわかる？

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

動物が人間の創り出す音楽にのって動き、まるでリズムに合わせるようだったという唐代の話を前回お伝えした。大型動物ならさもありなん、と納得するにしても、昆虫はどうだろうか。

コオロギが音楽に感応する話

実は、素晴らしい音楽に昆虫が感応する話が、梁の殷芸（470～528）の小説のなかに記録されている（以下の『太平広記』で商芸小説とするのは、宋代の太祖の父の諱の「殷」を避けて「商」を用いた）。それは梁をさかのぼる漢代の馬融（79～166）にまつわる以下のようなものである。

> 馬融は二郡両県に赴任したが、政務はとくにこれといってなさず、仕事は簡単に処理した。武都（甘粛省）に七年、南郡（湖北省）に四年いたが、ひとりの死刑も審議することはなかった。音楽を好み、琴や笛が上手であった。演奏から気が出るたびに、コオロギがそれに合わせた。（馬融歴二郡両県、政務無為、事従其約。在武都七年、南郡四年、未嘗按論刑殺一人。性好音楽、善鼓琴吹笛。毎気出、蜻蛚相和）　（『太平広記』巻203所収の『商芸小説』）

これだけ読むと馬融という人は、仕事はあまりしなかったように受け取られるかもしれない。しかし、馬融は後漢時代の学者で、当代随一の名声を得た大儒とされ、『周易』『尚書』『毛詩（詩経）』『礼記』などの「伝」（注釈）を著した。また音楽への造詣も深く、「長笛の賦」をつくっていて、かの『文選』の音楽に収録されている。そんな馬融であるから、コオロギもその音楽に合わせたと、彼の演奏が特別であったことを述べている。

「蜻蛚（コオロギ）」は「蟋蟀」とも表記される。『詩経』にも「七月、野に在り。八月、宇に在り。九月、戸に在り。十月、蟋蟀、我が牀下に入る」（豳風・七月）と、秋から初冬に見られ、秋が深まるとともに徐々に人の住処に近づいてくるものとして記されている。その鳴き声が聞く人に秋をしみじみと感じさせてくれることは、韓愈の「秋懐詩　十一首」（その二）に「寒蝉は暫く寂寞たるに、蟋蟀は鳴いて自ずから恣なり」とみえるようであった。また、中国ではコオロギを戦わせる「闘蟋蟀」という遊びが、宋代には流行していたという。

このようによく知っているコオロギが、音楽に合わせて鳴くなんてあり得ないと、合理的に考える人がいても不思議ではあるまい。宋代の呉聿（生卒年未詳）は『観林詩話』のなかで、「気出」と「精列」は相和歌の曲名であって、それを殷芸がとり違えて誤解したのは、笑止千万だと言う。いまの常識からしても、虫が音楽を解するわけがないと思うほうが普通であろう。

しかしながら、現代科学は、コオロギが音を理解することをかなりはっきりと証明した。それは、福富又三郎氏（北海道大学大学院生命科学院）、小川宏人氏（北海道大学大学院理学研究院）によって発表された「Crickets alter wind-elicited escape strategies depending on acoustic context.（コオロギは聴覚状況に応じて気流逃避戦略を変える）」という『Scientific Reports』にオンライン公開（英国時間2017年11月9日）された研究論文にみえる。概要は以下のとおり。

> これまで昆虫の聴覚系は、定型的な行動を引き起こすためのものとして考えられてきました。しかし、今回の研究から、昆虫の耳が単に交配相手に近づいたり、天敵から逃れたりするためのきっかけとなる刺激を感知しているだけではなく、複雑な「状況判断」にも使われているという、新たな機能的側面を持つことがわかりました。哺乳類に比べてずっと神経細胞が少ない小さな脳を持つ昆虫は、細胞レベルでの神経回路の理解を目指した研究が盛んです。そのなかでもコオロギの聴覚系は、古くから特に研究が進められているものの一つです。

そして「昆虫が聴覚を状況把握に用いていることが新たに発見された」と結論づけている。これが現代の科学が最近辿り着いたことだとするなら、古代の中国人はすでにそれを知っていたことになる。へたに合理主義をふりかざして「気出」「精列」が曲名だとするほうが、こんどはこじつけのように見えてくる。現代科学からすれば、コオロギが馬融の音楽に感応したという話を事実として受け入れるほうが自然ということになろう。

蜘蛛が曲に合わせて踊る話

コオロギに限らず、昆虫も音楽を解する例として、もうひとつ蜘蛛の話がある。それは、唐代の穆宗（821～824在位）のとき、倭国（日本）の者と言われていた韓志和の不思議な技芸の一つである。韓志和は木に彫刻すると、それが動きだすという技芸をもっていた。鸞や鶴が本物にそっくりに鳴いたり、啄んだりするのや、彫刻の猫が鼠を捕獲するのをみては皇帝も喜んだ。しかし木に彫刻した龍が動き出すと、さすがの皇帝も怖くなった。そこで別の技をということになった。

> 韓志和は懐から周囲が数寸の桐の箱を取り出した。そのなかには蝿虎子と名づけられた蜘蛛が入っていた。その数はわずか百や二百ではなかった。それは皆赤く、それは丹砂を食べさせたためということだった。それを五つの隊に分け、梁州の曲を舞わした。穆宗は宮廷楽師をお呼びになり、梁州の曲を演奏させた。すると蝿虎子たちはまわりながら往ったり来たりしたが、みなリズムにあっていた。言葉を奏上するくだりになると、いつもはっきりとせず蝿の声のようであった。曲が終わると、連なって退場した。それには尊卑の別があるようであった。韓志和が蝿虎子を指の上におくと、数歩行かないうちに鷂が雀を獲るように蝿を獲り、獲らないものはまれであった。穆宗はこの技は小さいが見ごたえがあると喜び、すぐに色とりどりの銀の器を褒美に与えた。（志和於懐中將出一桐木合方數寸。其中有物名蝿虎子。数不啻一二百焉。其形皆赤、云以丹砂啗之故也。乃分為五隊、令舞梁州。上召国楽、以挙其曲。而虎子盤廻宛転、無不中節。毎遇致詞処、則隠隠如蝿声。及曲終、累累而退。若有尊卑等級。志和臂虎子於指上、猟蝿於数歩之内、如鷂擒雀、罕有不獲者。上嘉其伎小有可観、即賜以雑彩銀器）
>
> （『太平広記』巻227所収の『杜陽雑編』）

皇帝から宝をせしめた韓志和は怪しい術を使ったのかもしれない。しかし、コオロギに音がわかるという現代科学は、蜘蛛もリズムに合わせるということも遠くない将来に発見してくれるのではないか。そんなことを考えながら、古代の音にまつわる記事を眺めると、合理的思考はひとまず置いてみたくなる。

ヴァチカン便り（57）

混迷する次期法王の選出

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

混迷する次期法王の選出

法王フランチェスコは、5月29日、新しい枢機卿を21名任命した。法王在任中に8度目の新枢機卿任命、またその人数も21名の多きに上り、人々は目を見張った。選ばれた枢機卿の中には、かなり名を知られた人物もいるが、そうでない人物もいる。その内訳を紹介しよう。

イタリア人は5名。しかし、そのうち法王を選ぶコンクラーベに参加できるのは、たった2名だけである。まず、モンゴルに伝道師として赴任しているジョルジョ・マレンゴ神父。モンゴルに関係する初めての枢機卿だ。そして、イタリア北の都市コモのオスカール・カントーニ神父である。コモから枢機卿が輩出されたのは歴史上初めてのことだった。イタリアでよく知られた重要都市トリノ、ミラノ、ジェノヴァ、パレルモには、枢機卿は現在誰もいない。

モンゴルに関係するマレンゴ神父は48歳。任命された21名の中で一番若い人だ。ローマ評議会からの任命は3名である。イギリス人のアーサー・ローシュ、韓国人コー・ヒューリング・シクとスペイン人のフェルナンド・ヴェルゲス・アルツァガである。

この新枢機卿の任命で、法王選出のためのコンクラーベに出席できるのは132名となった。法王パオロ6世の時に、コンクラーベに出席できるのは最大120名と規定されたが、これはすぐに有名無実となってしまった。

今回の任命を受けて、コンクラーベに出席できる枢機卿は、ヨーロッパ人54名、南北アメリカ人38名、アジア人20名、アフリカ人17名、オセアニア人3名である。法王フランチェスコの下、枢機卿の世界分布はさらに一段と広がった。その分、逆にイタリア人を中心とするヨーロッパ人の数はさらに減少している。例えば、現法王フランチェスコを選出した時には、イタリア人の枢機卿の数は115名中28名だった。今回の新しい枢機卿の任命の後は、イタリア人の枢機卿の数は132名中わずか21名となってしまった。前回、イタリア人を除くヨーロッパの枢機卿は、100名中52名だったが、現在では100名中41名となっているのだ。

純潔について

純潔、とりわけ結婚前の純潔に対するヴァチカンの見方は、愛における真の交わりとして扱うべきだという考え方である。結婚についての法王の声明が、「結婚生活のためのカソリックの教理習得の道のり」と題して、ヴァチカンの「信徒・家庭・いのち」の部署から発行された。この文書には、結婚を前にした準備期間や間近に結婚を控えた時期をどう過ごすかについて、信徒の指針が記されている。まずは教会で司祭の教えをよく聞き、婚約期間中に夫婦の役割を十分理解することが大切だとされる。また、結婚して最初のうちは相互の理解を促進すべきことが説かれている。

結婚生活の中にあって、「神から遠ざかる」という罪に陥らないよう、たえず気をつけなくてはならない。夫婦2人の結びつきの神秘性について深く考え、財産のこと、まして離婚した後に自分の取り分について思い巡らすべきではない。夫婦が相互理解の愛に基づいて、家族への愛と勇気を示すことが大切であるとも述べられる。その一方で、別れることが避けられない場合があり、そうすることが推奨されるべきこともあり得ることも、この文書では認めている。

法王のロシア訪問は

本誌2022年4月号で、ローマ法王はすぐにでもロシアを訪問することに言及した。しかし、法王の体調（膝の痛み）や、ロシアの現状を鑑みて、時期が熟しておらず、訪問はいまだに実現していない。法王は5月3日に膝の手術を受けると予告していたが、本稿執筆の7月3日現在に至るまで、手術は行われていない。法王は移動の際、パパモービレ（車）に乗ったり、手押し車を用いている。

ここでは、法王のロシア訪問やプーチン大統領との面会の可能性について、メディアが取り上げた枢要な人物の発言を紹介したい。

ヴァチカンのロシア大使館アレクサンダー・アグデーブ大使は、ロシア人記者セルジェイ・スタンドセフに対して、「どんな国際情勢であろうとも、ローマ法王との対話は、モスクワにとっても大変重要だ。法王は常に受け入れられ、市民もそれを望み、対話を望んでいる」と述べている。

しかし、ヴァチカンのウクライナ大使館アンドリル・コラシュ大使は、「法王のメッセージは意義がある。しかし、人の話を聞かず、忠告を受け入れないプーチンにとっては、法王の願いは聞き入れがたいものだろう」とも語っているのだ。

イタリア民主党党首のエンリコ・レッタは、「法王の提案は立派なものである。彼は平和に向け、歩みを進めており、戦争開始当事者を説得するのが自分の役目と考えている、成功を祈るのみだ」と述べている。

一方、右翼のレーガ党のマッテオ・サルヴィーニ党首は、「法王の発言について驚いている。宗教の代表者としての霊的な呼びかけではなく、まるで一国の代表として、つまり、ヴァチカン市国の長として、平和に貢献するというのだ」と語っている。

法王がロシアを訪問したいというニュースは、ウクライナのカソリック教会内部に大きな衝撃を与えた。エザルカ神父は、「イタリアにいるウクライナ人のカソリック信者に大きな動揺を与えた。法王が、ロシアのウクライナ侵攻の理論の正当性を認めたら、我々にとっては大変なことになる」と驚きを隠せない様子だ。

その一方で、ヴァチカンの外交官であり、ルムサ大学の学長でもあるフランチェスコ・ボニーニは、「法王のモスクワでのプーチンとの邂逅は、決して空振りには終わらないだろう。むしろ逆に、平和への歩みが開かれるだろう」と述べている。

ロシア大司教兼ロシア連邦カソリック司教団長パオロ・ペッツィは、「ローマ法王のロシア訪問の発表はプーチンの行為を肯定的に捉えているからだと思う」と語る。しかし、クレムリンに近い理論学者のアレサンドル・ドーギンは、「そんなことはない。法王は一体何を言うかって？『すべてを停止させなさい』と命じるだろう。そんなことは、プーチンは百も承知なのだ」と反論している。

社会の調和と平等を目指す運動の創始者でもあるイタリア人のアレックス・ザノテッリ神父は、「法王は戦争を止めさせるために、すべてのカードを使うだろう。今、戦争を止めさせられるのは法王だけだろう」と主張する。このザノテッリ神父の言葉ほど、カソリックの期待を端的に表明しているものはないだろう。

「碍」の字表記問題再考（20）仏教にみる障害者像

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎 *Saburo Yagi*

仏教の開祖は釈尊（釈迦牟尼世尊の略・紀元前560～480）である。釈尊は北インドのカピラバストゥに生まれ、クシャトリアの身分に属する釈迦族の王子である。クシャトリアとは、古代インドのバラモン教社会における身分制度（ヴァルナ）で、その2番目の階層を意味する。最上位が神聖視される司祭者などのバラモン、2位が王族、武人などのクシャトリアである。釈尊は栄華で豊かな環境の中に身を置き、育っている。しかし、出生直後に母を失い、内面的に孤独な青年時代を送っている。生きることの意味は何か、老いること、病になること、死とは何かという「生老病死」について深く悩み、29歳の時に妻や子、家族に別れを告げ、地位も名誉も財産も捨て孤独な求道の旅に出ている。6年にわたるバラモン教の出家者としての苦行生活に身を置くものの、満足する悟りを得ることはできなかった。絶望的な心にさいなまれる中、35歳の時に釈尊は菩提樹の下で悟りを開いている。それ以降釈尊は新たな修行者としての道を歩み、それが仏教の源流となっている。

釈尊の死後、東インド地域に仏教は伝播し、原始仏教時代（前525～前380頃）を迎える。その後各地の異なる生活習慣や戒律に対する解釈の相違から仏教は分派していき、紀元前100年頃には上座部（南伝仏教）12派、大衆部（上座部に異議を持つ革新仏教）8派、小乗（自己の解脱を主とする仏教）20派に分派している。

「仏陀（覚者）」になるための教えである仏教には多くの宗派が存在し、それぞれの経典に基づき教えを説いている。

勝鬘経

摂政としての厩戸王が残した業績の一つは『三経義疏』の注釈書を撰述したことである。義疏とは経典の意義、内容を解説したものであり、厩戸王は611年（推古天皇19）に『勝鬘経義疏』1巻、613年に『維摩経義疏』3巻、615年に『法華経義疏』4巻の3経典の注釈書を著している。

『勝鬘経』は、正式には『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』と言い、全1巻の経典である。悟りを求める多くの人々を救う仏教の経典として論理的、哲学的に書かれており『法華経』とならぶ重要な経典と言われている。この経典の成立は紀元前3～4世紀頃と推定される。内容は、古代インドのコーサラ国王の娘で在家の信者であった勝鬘夫人が仏教について説いたものである。仏陀と成ることのできる唯一の教えであることを説き、釈尊に認められたという経典である。

この経典は、インドから中国に伝わり、インド出身の中国の訳経僧である曇無讖によって5世紀頃に漢訳されている。その後、劉宋時代にインド出身の訳経僧である求那跋陀羅、8世紀頃に訳経僧の菩提流支が『大宝積経』の中で『勝鬘夫人会』と題して漢訳している。厩戸王が著わした『勝鬘経義疏』は、求那跋陀羅が訳した『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』を解説したものである。内容は、序説・正説（本論）・流通説に分かれている。序説に記された内容を少し確認したい。

夫勝鬘者。本是不可思議。何知如來分身或是法雲大士。但遠照踰闍之機宜。以女質爲化。所以初則生於舍衞國王盡孝養之道。中則爲阿踰闍友稱夫人顯三從之禮。終則影嚮釋迦共弘摩訶衍之道。論其所演則以十四爲體。談其大意非近是遠爲宗。所以如來每説讃同諸佛。發言則
爲述成。勝鬘者。世以七寶嚴其肉身。而今以萬行嚴其法身。故云勝鬘。師子吼者。自宣大理無所怖畏。義同師子不畏衆狩。故云師子吼。勝鬘就當體得名。師子擧譬爲稱。一乗大方便方廣者。擧其所説之法。　（下線は筆者が強調）

（簡約）
波斯匿王と末利夫人が、大乗の教えを信ずるようになってからのある日のこと。この教えを、友称王の許へ嫁いだ娘の勝鬘に報らせて、入信を勧めようと思い立ち、二人相談の上でこまごまと手紙を書いて使者に託した。父母の手紙を見た勝鬘は、それによって直接仏のみ声を聞く思いがした。静かに仏を念ずると、仏は空中に姿を現し給い、全身からは浄らかな光明が光り輝いていた。義疏にはこれを感応の仏であり、これこそは聖体円備の真実者であるとし、その光明こそは一乗永遠の理を現わしたものであると解している。勝鬘が、この仏に帰依のまことを捧げる。

この序説のなかで、経典の成り立ちと真髄が綴られている。下線部で示した「三従之禮」は江戸時代に貝原益軒が『和俗童子訓』の「女子ニ教ユル法」で説いた「女子教育」の言葉と重なるものである。「家にあっては父に従い、嫁しては夫に従い、夫死して後は子に従うこと。」という意味である。この言葉の出典は四書五経の一つである『礼記』とされ、女性に対する封建的、隷従的道徳思想を表した言葉である。この「三従之禮」が『勝鬘経』のなかで記されているが、教えにおいては男女の貴賤、差別はないことを説いている。

2つ目の下線の言葉「一乗大方便方廣者」は、生きとしいける人間はすべてみな仏陀になることが可能であり、成仏できることを意味している。勝鬘夫人自身が在家の立場であり、出家修行者ではない。それも当時のインドでは女性に対する差別が強くあるなかで、在家の女性が「一乗大方便方廣者」を篤く説いているのである。出家者だけが救われるのではなく、在家者であっても仏教の教えを実践するならば、すべての人は救われることを勝鬘夫人は説き、釈尊はこれを賞賛したといわれている。

この『勝鬘経』の中に示された障害の表記、文言については、次回で検証したい。

［引用・参考文献］
梅原猛『地獄の思想・日本精神の一系譜』中公新書、1967年。
四天王寺勧学院『現代語訳・勝鬘経義疏』四天王寺事務局、1976年。
高取正男ほか『古代日本と仏教の伝来』雄山閣出版、1981年。
梶村昇『日本人の信仰・民族の〈三つ子の魂〉』中央新書、1988年。
中村元『広説佛教語大辞典』東京書籍、2001年。
中村元『現代語訳大乗仏典3「維摩経」「勝鬘経」』東京書籍、2003年。

第1講：151「をびや許し」

おやさと研究所長
永尾　教昭　*Noriaki Nagao*

「をびや」とはお産の部屋である「産屋」が転訛したものと考えられる。をびや許しは、安産のための御供で、現在妊娠6カ月以上になると妊婦、夫あるいはどちらかの両親であれば願い出て、教組殿で頂くことができる。

御供は三包みになっている。そのうち、一つは「身持ちなりの御供」と言い帰宅後すぐに頂く。次が「早めの御供」として産気づいたら頂く。最後の三包み目は「治め、清めの御供」として出産後に頂く。元々はったい粉であったが、明治11年頃より金平糖となり、さらに明治37年より現行の洗米となる。

本逸話では、諸井国三郎が自分の四人目の子供の出産に際して、諸井がをびや許しを頂きたいと願ってきたのに対して、高弟の一人、高井直吉がやろうとした。ところが、切った紙が曲がっており、それを見ていた教祖は、自ら紙を切り金平糖を三粒ずつ三包み作られた。

高井がやろうとしたところを見ると、当時必ずしも教祖が直接お下げになったわけではなく、側にいた高弟たちが代わって出すことも多かったのではないか。しかし、諸井が願い出たのに対し、教祖自らなさり、さらに高枕、腹帯などは必要ないと言われているのは、改めて諸井を通してその理を教えられたものと思う。

をびや許しは、嘉永7（1854）年に教祖の次女、おはるが懐妊したとき、その腹に息を三度掛け三度撫でられたのが始まりである。その後おはるは安産し、徐々に教祖の不思議な守護の噂が広まり教勢は伸びてゆく。ここから本逸話の明治17（1884）年まで30年間ある。その間に願い出て来た者は相当数に達していたと思われるので、教祖が直接息を掛けられる形から徐々に本逸話のような形に変遷していったものと思われる。

本逸話を基に、二つのことを思案したい。まず「をびや許しの始め」であるおはる出産時のことである。この日は嘉永7年11月5日である。この年日本は再々大地震に見舞われており、その前日、11月4日には駿河湾から遠州灘沖、熊野湾あたりを震源とするマグニチュード8の大地震が起こり死者は数千人に及んだ。

翌11月5日、つまりおはるが長男を安産したその時、紀伊水道から四国沖を震源とする地震が起こり死者数千人で、津波も発生する。その時、紀州の濱口梧陵という人が津波を予想し、高台にあった稲の束に火を付ける。驚いた村人が高台に登ってきた時、津波が押し寄せた。この逸話から、国連では11月5日を「世界津波の日」に制定している。おはるがをびや許しを頂いて安産したのは、まさにその日だ。しかも二日連続の大地震の最中であった。したがって11月5日はお道の者にとっては、「をびや許し記念日」とも言えるかもしれない。こうして近在でも教祖の不思議な力が話題になっていったのだろう。

今一つは、をびや許しはまさに安産の許しであって、これを頂けば子供は無病息災に育つということでは決してないということだ。なぜならば、おはるが安産した子供、亀蔵は数え7歳で夭折している。そして、三男として生まれ変わって、後に初代真柱になったとされる。

一方、本逸話の諸井国三郎の四女も夭折している。そのことは逸話篇187「ぢば一つに」に紹介されている。四女は数え3歳で出直し、その際教祖は「ぢば一つに心を寄せよ」というお言葉を下されている。

「をびや許しはよろづ道あけ」と言われる。つまりをびや許しが契機となって道の信仰は飛躍的に伸びてゆく。なぜ、教祖はまずお産を重視されたのか。もちろん、当時出産は女性にとって命がけのことであった。難産の末命を落としたり、また産後の肥立ちが悪くて床に伏せる人も少なくなかった。言わば女性救済の一つの象徴的な手段として、このをびや許しを通して道を広めていかれたのではないか。

今一つは、私見であるが、帯解寺の存在があったからではないかと思う。帯解寺は、平安時代より子授け、また安産のご利益がある寺として名高く、そこから帯解寺という名称となった。そして現在でも付近のJRの駅名は帯解である。現在でも皇室の方が懐妊されると腹帯を献納している。

教祖ご在世当時、この寺は多くの参拝者で賑わっていたことだろう。教祖は決してそれに対抗するということではなく、むしろ妊婦たちの不安を取り除くために昔ながらの迷信などを否定されたと思う。その証左が、本逸話にある、高枕、腹帯は不要、柿を食べると流産するという迷信を否定されたことでもあると思う。

私の個人的な不思議なご守護の話をさせて頂く。私と妻はフランスにあるヨーロッパ出張所に1984年に赴任した。そして一年後に長男をもうけた。しかし、その子は先天的なダウン症という知的障害を持っていた。それだけではなく、心臓、腎臓その他にたくさんの合併症があった。

二年後妻は第二子を妊娠したが、その予定日が、おぢばから真柱（三代）夫妻がヨーロッパに巡教される真っ最中になった。国内と違い、海外はそもそも手が少ない。当時、ヨーロッパ出張所は、所長夫妻、私たち夫婦、そして青年、女子青年が一人ずつという陣容であった。それだけで運転から、何もかもしなければならない。海外の場合、一泊で帰られるわけではない。数日間おいでになる。もちろん近在のようぼくの方々も手伝いに来てくださるが、その方たちもそれぞれ自分の仕事もある。そこに第二子の予定日が重なった。通常、フランスでは出産には夫が立ち会わねばならない。長男は毎日のように病院に行かねばならない。海外在住信者にとって、当時も今も真柱夫妻の来訪ほど嬉しいことはない。しかし、その時は喜びの一方で大変悩んだ。

ところが、をびや許しを頂いて、第二子、長女は予定日より三週間も早く陣痛が来て出産したのである。しかし未熟児ではなかった。驚いた人は、薬で出産を早めたのかと聞いてきたほどだった。もちろん自然分娩である。

そして、真柱夫妻が到着された頃には妻も退院しており、まさ奥様は生後間もない長女を抱いてくださった。その時の写真を私は今も大切に保存している。

この時ほど、「またたすけをひやぢうよふいつなりと　のばしなりともはやめなりとも」（第8号32）という「おふでさき」のお歌が身に沁みたことはなかった。

第2講：111「朝、起こされるのと」

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

「朝、起こされるのと」

教祖が、飯降よしゑにお聞かせ下されたお話に、「朝起き、正直、働き。朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と。

今回、取り上げたいのは以下の2つの点である。第1に本席飯降伊蔵の入信とよしゑの生涯、第2に本席の生き方に学ぶ「朝起き・正直・働き」である。

本席飯降伊蔵の入信とよしゑの生涯

よしゑは慶応2（1866）年8月17日に、大和国添上郡櫟本村（現天理市櫟本町）に、飯降伊蔵・さとの長女として誕生した。後に本席と定まる飯降伊蔵の入信は、妻さとの流産後の肥立ち患いであった。元治元（1864）年6月25日、伊蔵は救けていただいたお礼に、さとと共にお屋敷へ初めて帰った。大工であった伊蔵はお社の献納を思いつき、翌7月26日におやしきに帰った際にその旨を教祖に申し上げた。ところが、「社はいらぬ、小さいものでも建てかけ。」という教祖の言葉を受けて取り掛かったのが、現在の「つとめ場所」の普請であった。その後、まもなくして大和事件の「ふし」が起こったが、伊蔵はつとめ場所の完成を責任をもってやり遂げた。

さまざまなふしを見せられながらも、救けていただいた御恩報じとして、伊蔵夫妻は喜んで毎日を通り、2年後、待望の我が子を授かった。伊蔵が教祖にお目通りし、さとの身上をたすけていただいたうえに、念願の子供を授けていただいたお礼を申し上げたところ、教祖は、「何でもよきことは『よしよし』というのやから」と仰せられ、「よしゑ」と命名されたと伝えられる（「飯降よしゑ」『改訂天理教事典 第三版』）。

また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、よしゑが、「ちよとはなし、と、よろづよの終りに、何んで、ようし、ようしと言うのですか。」とお伺いしたところ、教祖は、「ちよとはなし、と、よろづよの仕舞に、ようし、ようしと言うが、これは、どうでも言わなならん。ようし、ようしに、悪い事はないやろ。」と仰せられた逸話が掲載されている（109「ようし、ようし」）。このように、教祖は「よしよし」と前向きに喜んでいくことの大切さを、よしゑに伝えられた。

明治14（1881）年、飯降一家はおやしきに一家で伏せ込んだ。その後、教祖は、「三味線を持て。」と、よしゑが12歳の時に、女鳴物の三味線を教えられた。明治20年陰暦正月26日、つとめを急き込まれた親神の思召に応え、「おつとめの時、若し警察よりいかなる干渉あっても、命捨てゝもという心の者のみ、おつとめせよ」（『稿本天理教教祖伝』329頁）という中山眞之亮初代真柱の声に応えて、当時22歳のよしゑは三味線を勤めている。このように、よしゑは教祖ご在世当時、両親である伊蔵夫妻とともに教祖の傍でつとめ、教祖から教えていただいた三味線を命がけで勤めた。

本席の生き方に学ぶ「朝起き・正直・働き」

本逸話に類似した逸話に「三つの宝」(29)がある。その逸話は、教祖が伊蔵に対して、稲の種である籾を通して、「朝起き・正直・働き」を教えられたものである。このことから、教祖は、日々の生活の実践として、「朝起き・正直・働き」を繰り返し説かれていたであろうことが推測できる。

「朝起き」に関して、「朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。」とあるように、日々、親神から身体を結構にお借りしているため、朝は誰かに起こされて起きるというような一日の迎え方であってはいけない、ということが諭される。「一日の理は朝にある。」（明治22年5月7日）という「おさしづ」の割書には、永尾よしゑ、つまり飯降よしゑの名前が記されている。今朝も身体をお借りして目覚めることができたことに喜び、親神に感謝しながら朝を迎えるのと、朝誰かに起こされ、身体をお借りできていることを十分に感謝できないまま一日を始めるのでは、大きな違いがある。

「正直」については、「蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」と諭されている。『日本国語大辞典』によれば、「正直」とは、「嘘をつかないこと」や「ごまかしのないこと」という意味ばかりではなく、「陰日向のないこと」、「素直であること」という意味がある。

おやしきから櫟本への帰り道、夜中にもかかわらず、伊蔵は誰に言われるでもなく壊れた橋があれば直し、土の道路を補修しながら帰られたと伝えられる。「千軒きっての正直者」と呼ばれた背景には、単に嘘をつかないという意味だけではなく、陰日向のない働きがあった。

さらに、正直について、「聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」とある。『天理教教典』の第8章「道すがら」にも記されているように、口と心と行いが常に一致することの重要性が教えられている。また、これら3つが今はたとえ一致していなくとも、少しでも一致するように心の成人を重ねていくのが、信仰者としての歩み方であると言えよう。教祖を慕い、親神の教えを素直に実行する父伊蔵の「正直」の姿があったからこそ、教祖は、「嘘」という対義語を出しながら諭されたと考えられる。

「働き」について、「もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と諭されている。ここで言う、「働いた上に働く」とは、単に労働時間を増やすという意味ではなく、自分のための「働き」だけではなく、世のため人のために「働く」という意味だと考えられる。このことについては、「同じ働きをしても、蔭日向なく自分の事と思うて働く」と、何でも我が事だと思って働き、「はたはたの者を楽にするから、はたらくと言うのや。」と、天理教の信仰者としての生き方や働き方が示される（197「働く手は」）。

日々、「朝起き・正直・働き」を地道に実践しながら3つの籾種を蒔くことで、穂にはやがて沢山の実りを迎える。この意味において、本逸話は、本席飯降伊蔵・よしゑ親子を通して、毎日素直に信仰を実践していくことの重要性が凝縮した逸話であると言えよう。

図書紹介（131）

櫻井義秀著

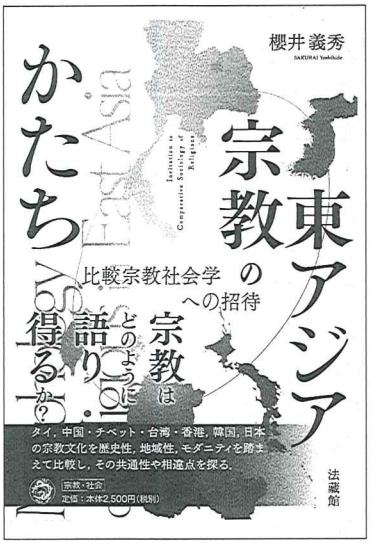
『東アジア宗教のかたち 比較宗教社会学への招待』（法蔵館、2022年）

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

宗教はどのように語り得るか？

タイ、中国、チベット、台湾、香港、韓国、日本の宗教文化を歴史性、地域性、モダニティを踏まえて比較し、その共通性や相違点を探る。

本書の帯にはそう書かれている。宗教に「かたち」を見いだし比較しなければ、そこにある共通性、異質性は捉えられない。長年にわたる現地調査を踏まえ、著者は、これらの地域で近代化以降に変容展開した伝統宗教・新宗教を俯瞰する。



著者の櫻井義秀氏は、これまでにもこの地域での調査研究の成果を継続的に発表してきている。本書は、主に『月刊住職』で発表された「比較宗教の視座から」と題された連載と、いくつかのシンポジウムでの講演などをもとに構成されている。地域における宗教の特徴を踏まえて、その「かたち」を意識して比較していく試みである。それは特に近代における宗教変容を考えるために必要だと思われることでもある。「はじめに」では「宗教のかたち」を語ることの結果に期待して次のように述べる。「比較宗教学への招待」を副題にしている理由がここにあると思う。

「私は、このような比較宗教文化論的な語り方を入れない限り、世俗化と伝統的共同性―家族・地域社会の解体が進行しつつある現代日本において、宗教者は一般社会の人々はいわずもがな、自教団の信徒に対してもそれぞれの宗教が持つかたちを説明できないのではないかと思っています。二〇二五年、団塊の世代が七五歳以上となり、高齢者の中心世代となります。青年期に合理的発想や革新的政治文化の影響を受けたポストモダンの高齢者は、宗教そのものへの忌避感が強く、昔からこのようなやり方できたということだけではいささかも納得しない世代です。本書が個々の宗教を研究する人たちや、宗教に関わる人たちにとって宗教の「かたち」を意識する素材になれば幸いです。」（「はじめに」より）

「第一章　宗教の進化と社会科学」は、まず、「人類の進化と宗教文化」について語られる。そこで、「なぜヒトが進化したか」については諸説があるが、「私はヒトが生物学的な集団（血縁の雌雄と子どもとその仲間）を超えた集団を形成し得た時に、ヒトは動物から人、人間へ変わったのではないかと考えます。」と述べ、ヒトには協力関係が本能として埋め込まれてはいないので、「文化の介在なしには人と人とが結び合うことができない」とする。そして、「利己的な人が協力するのはなぜか」という問いかけ、「共有財産という高度に文化的な思考を働かせないと協力行動が取れない」「私にとって大切なものは皆にとっても大切なものという発想は、高度に人間的な能力の賜」であることを説明している。その上で、発達心理学や進化生物学の「心の理論」に注目し、次のように述べる。

宗教的感性とは、目の前にいない他者の心や絶対的他者の心を想像して祈念する、自己を律するというものが始まりではなかったかと思われます。そうしますと、宗教的感性や観念の発達によって他者性への関心は高まり、集団内での協調性の規範が確立し、さらに宗教的存在を想像する手助けとなるシンボルやシンボルを操作する儀礼・儀式によって、人間の心はさらなる発達を遂げてきたのではないかという推測も可能かと思われます。

さらに、宗教の起源やその展開について、宗教進化論や脳科学の知見から言及し、宗教文化とは人間にどのようにかかわってきたかについて考察し、そして「比較宗教社会学」の節では、改めて「宗教の概念」から始め、「社会学とは何か」「宗教社会学とは何を研究するのか」「宗教社会学者の現況」「比較という思考方法」と進み、「比較宗教学」へ続く。

「第四章　東アジア宗教のかたち」は、「縦糸・横糸・撚糸で紡がれる宗教文化」「東アジアの諸宗教」「宗教と政治体制」「近代と宗教」の４つの節で構成されている。著者の大学でも中国の留学生が増える中、中国との研究交流が増え、東アジアへ目が開かれることになった。東アジアの宗教文化をタイの宗教文化と比較すれば、まず東アジアのどの国にもタイの上座部仏教に匹敵する国家宗教や国民の宗教がない。また東南アジア諸国とも異なる。その理由は二つあって、「一つは、東アジアの宗教文化は、中国の宗教文化に典型的ですが、儒仏道が家族や地域社会の中に溶け込んで渾然一体となって人々の日常生活を彩っている」「もう一つは、……近代化の宗教に行政的管理の浸透」と述べる。

著者の幅広い視野と長年のフィールドワークの経験が深い考察となって、丁寧な語り口で語られている本書は、宗教学や社会学の研究者だけではなく、それらの分野をまたぎ、またタイや東アジア、チベットなどの地域研究に携わっている者にも薦めたい１冊となっている。

付録には、当該研究の参考文献が著者の９冊の本を含め、簡単な内容紹介とともに研究地域ごとに列記されていて、更なる関心を呼び起こしてくれる。

目次は以下の通り。

はじめに
第一章 宗教の進化と社会科学
第二章 タイ仏教のかたち
第三章 タイ政治と仏教
第四章 東アジア宗教のかたち
第五章 中国・台湾の宗教変容
第六章 韓国と日本の宗教変容
第七章 ナショナリズムと生きる希望
付 録 アジアの宗教を読む 20 冊
参考文献
初出一覧
あとがき
索 引

2022年度伝道研究会（5月18日）
「出張所創立50周年記念祭を終えて、反省と次のステップ」

清水　直太郎

今年2022年3月20日、コロンビア出張所創立50周年が執り行われた。今回の発表は創立50周年を終え、遡ること11年前の創立40周年への取り組みや、それ以降、10年間の方向性に基づく道の歩みと反省を主に発表した。特に、現地コロンビア人の講師の人材育成をどのようにしたか、力を入れた活動と方法を述べ、その経緯と問題についても言及した。

また、1972年3月8日に天理教コロンビア出張所が開設されてから50年の今日までの大まかな流れと出張所の機能の分岐点についても言及、設立当初の出張所の目的と神殿落成からの出張所の役割について概略的な分析を行った。

さらに、コロナウイルスによるコロンビア社会におけるロックダウンが及ぼした、50周年記念祭に向けての活動への影響と、ラテンアメリカ社会の習慣を踏まえて、これからの天理教の海外布教においての展望を述べ、海外拠点において必要な行事・活動を示唆した。

第348回研究報告会（5月26日）
「心の資本を育てるということ
天理大学でのPBL（問題解決学習型授業）10年のふりかえり」

谷口　直子

「資本」とは企業活動の原資であり、企業は資本を増加させることによって成長していく。人も同様で、「心の資本」を原資にして成長していくのではないかと思う。この視点で、これまで学生と行ってきたPBL（プロジェクトを行うことで問題解決を学ぶ形式の授業）の意味を考えてみた。

人が生涯学び続けて成長することを支援する「生涯教育」を学ぶ学生たちは、問題を発見して解決に導き、達成感を味わうことで心の資本を増やすのではないか。そのためには学外の他機関と協働したPBLが有効な学習手段であるように感じて実践してきた。

大学でのPBLのみで簡単に心の資本の増強ができるものではない。また、すべてが成功例とは言えない。しかし、生涯にわたる学びは継続していくのだから、学生が卒業後の人生で当時の失敗を思い出して、それを資本とすればよいことだ。まずは、挑戦が大事なのだ。

PBLは時間と手間がかかる。しかし、卒業生と苦労した思い出を語るときに、学生時代に心の資本を充実させることが将来の成長につながるのだと、しみじみと感じている。

天理参考館で記念講演（5月27日）

澤井　真

天理大学附属天理参考館を会場に、4月15日から6月6日まで開催されていた第89回企画展「エジプト・カイロの大衆文化―1959年のタイムカプセル―」において、「タイムカプセルから紐解くエジプトの暮らし ―イスラームとの関わりから―」と題した記念講演を行った。それに先立つ4月22には、梅谷昭範学芸員が、第293回トークサンコーカンで「タイムカプセルが伝えるもの ―1959年のエジプト・カイロ―」と題して、企画展の趣旨と見どころを解説した。

講演の冒頭では、1959年にエジプト・カイロで収集された資料群がなぜ天理参考館に収蔵されているのかを、中山正善2代真柱と田中四郎氏（京都外国語大学名誉教授）の交流をめぐるエピソードを取り上げた。そのうえで、展示品のいくつかを、イスラームの教えやアラブ文化との関わりから解説した。おわりにあたっては、今となっては入手することが極めて困難な膨大な資料が、「タイムカプセル」のように天理参考館に保存することができたのは、大きなスケールで世界を眼差していた2人の出会いがあったからだと締めくくった。

第63回印度学宗教学会学術大会で発表

堀内　みどり

5月28日及び29日に標記大会がオンラインで開催された。28日午前及び29日には個人研究発表が行われ、堀内は、28日午後に開催された課題研究「受難と再生」（4名によるパネル発表、司会は東北大学の谷山洋三氏）において、「社会の中の天理教の教会：新たな展開への試み」と題して発表した。発表では、まず、地方都市における宗教施設の維持と活動の変容についての研究を紹介、宗教施設が持つ社会関係の維持や地域コミュニティの拠点としての機能に注目し、現代日本が抱える問題解決に向けた天理教の地方教会の試みについて検討した。

なお、天理大学関係の発表は以下の通り。

澤井治郎「教派神道と教典」

澤井真「イスラームにおける聖者論の展開」

澤井義次「ウィルフレッド・C・スミスの宗教理解とその特徴」

日本イスラム協会で講演（6月12日）

澤井　真

「イスラーム理解講座：スーフィズムとは」と題した公開講演会が日本イスラム協会で開催され、「生き方としてのスーフィズム―人間についての探究―」というタイトルで講演を行った。日本イスラム協会は、1963年にイスラーム諸国との文化交流を目的に設立された学会で、東京大学イスラム学研究室に事務局が置かれており、年2回公開講演会を開催している。コロナ禍の影響から、今回の講演会はオンラインでの開催となった。

講演では、「イスラーム神秘主義」とも表現されるスーフィズムが、イスラームにおいていかなる位置を占めるのかを、歴史的な経緯ばかりではなく、イスラームの神秘家であるスーフィーらのテクストを紹介しながら解説した。

スーフィズムは、歴史的に多くの民衆に支持された一方で、宗教的・政治的に危険視されたこともある。しかしながら、現代世界では、イスラームを知らない欧米のキリスト教徒との懸け橋となるなど、重要な役割も果たしてきた。こうした点を踏

まえるとき、スーフィズムを一つの思想として捉えるよりもむしろ、信仰的にいかに生きるかという「生き方」として捉えることができるのではないかと結論づけた。なお参加者は約80名であった。

第349回研究報告会（6月27日）
「かしもの・かりもの」の教え
松谷　武一（天理教南華分教会前会長）

松谷氏はまず、「神のからだ」という教えは「かしもの・かりもの」の教えと同様のものであり、その上でこの教えを体得していくことの必要性を述べた。そして、「おふでさき」で説かれた教えを、史実考証というアプローチで追求していく道程について、宇野義晴氏のもとで研鑽された時のことを紹介された。「おふでさき」の各表紙に書かれた初代真柱の筆跡研究、「おふでさき」が書かれた時期（日付）推定の過程など、大変興味深かった。

そのうえで、『ビブリア』53号に掲載された宇野晴義「天理教資料研究」（2）と中山正善『外冊『おふでさき』の研究』を根拠にしながら「おふでさき」における十年と三年三月について述べ、原典に説かれる「こくげん（刻限）」は非常に重く、「ようきづくめ」へとつながるものであることが強調された。

（堀内記）

連載執筆のねらいと執筆者紹介

英語文献にみる天理教

天理教の海外伝道を推し進める上で、いつ、どこで、だれが、なにを、どのように伝えるかは、その当初から大きな課題であり、教会本部、日本の関係教会、そして現地拠点において、布教師、言語、布教地の政治・社会・文化などのさまざまな要因が検討されてきた。加えて、天理教の布教師、教え、組織、布教方法、諸活動などが、伝道地の日本人以外の人々から、どのようにみられ、また認識されてきたかを知ることも、海外伝道のあり方や展開を考える上で非常に重要なことである。本連載では、先行研究などを踏まえつつ、主に欧米のメディアや政府公文書などに注目して、その記述の背景を明らかにしながら、天理教がどのようにみられてきたかを考えたい。

尾上貴行（おのうえ　たかゆき）

天理大学おやさと研究所講師。天理大学外国語学部英米学科を卒業後、オーストラリア・ビクトリア州立モナシュ大学修士課程修了。平成6年4月から同28年3月まで天理教海外部の北米・オセアニア課、ヨーロッパ・アフリカ課などで勤務。平成28年4月よりおやさと研究所所員。専門は日系移民研究、天理教海外伝道史、地域研究（オーストラリア、イギリス）。

2022年度公開教学講座のご案内

―信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（8）―

2022年度の公開教学講座は、次の日程で、昨年度と同様にオンラインでの配信を予定しております。ただし、状況に応じて、対面での開催も検討いたします。

第1回 5月　永尾教昭所長
151話「をびや許し」
オンライン配信中

第2回 6月　澤井真研究員
111話「朝、起こされるのと」
オンライン配信中

第3回 9月　岡田正彦研究員
139話「フラフを立てて」

第4回 10月　八木三郎研究員
108話「登る道は幾筋も」

第5回 11月　森洋明研究員
119話「遠方から子供が」

第6回 1月　堀内みどり主任
126話「講社のめどに」

グローカル天理
第23巻　第8号　（通巻272号）
2022年（令和4年）8月1日発行
発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan
© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University